

九州南部における広葉樹資源と経営の動向 (I)

— 宮崎県北部地域の民有林 —

宮崎大学農学部 甲斐 重貴

1. はじめに

最近、自然環境保全や遺伝子資源あるいは野生生物の保護、更には優良貴重材の供給などといった天然林の持つ多面的な機能に対する再評価から、林種転換を見直し、天然林、特に広葉樹天然林を保全していこうとする動きが各地でみられるようになってきている。このような流れの中で国有林では天然林施策が導入され、実行に移されている。

ところで天然林は当然のことながら国有林にだけではなく民有林にもみられる。特に九州南部にはかつての薪炭林である、常緑広葉樹を主な構成樹種とする天然林がまだかなり残っている。これらは今後、上述のような点に関して大きな役割を果たす可能性を秘めている。しかしながら現在のところ、国有林の場合と異なり、民有の広葉樹林やその機能に関してはそれほど関心は持たれていない。また資源状況や所有者の経営意識についてもよく知られていない面が多い。

本研究は九州南部の民有林における広葉樹資源や経営の動向ならびにその意義や役割を明らかにすることを目的として開始したものである。今回は宮崎県五ヶ瀬川計画区内の民有林に関する調査結果について報告する。

2. 調査地域の概況

今回調査の対象とした地域は宮崎県北部の五ヶ瀬川計画区である。この計画区は五ヶ瀬町、高千穂町、日之影町、北方町、北川町、北浦町、延岡市の1市6町からなり、総面積は155,487haで、五ヶ瀬川地域森林計画書¹⁾によれば、このうち森林面積は133,662haで総土地面積の86%を占め、民有林は84%の112,233haと森林が多く、また民有林の比率が高い特徴を持った地域である。

3. 調査地域内の民有林における広葉樹資源の概況

当地域森林計画書によれば以下のとおりである。民

有林のうち広葉樹林は49,562haで民有林森林面積の44%を占め、このうち天然林は44,718haで広葉樹林面積の90%となっており、広葉樹林が多く、特に天然林が多い。これらの広葉樹林の内容をみると、齢級別では6齢級が最も多く、これを中心にやや正規型の分布を呈するが、13齢級以上のものはほとんどない。また林種別にみると天然林は6齢級を中心として幅広くみられるが、人工林は低い齢級のものが多い。所有規模別にみると、所有者数では1ha未満の層が全体の51%、面積では10~30haの層が24%で最も多く、所有形態別では個人有が面積で78%と圧倒的に多く、その他による所有は少ない。一方、樹種別では、広葉樹賦存状況調査資料²⁾によれば、常緑広葉樹のカシ、シイが蓄積で52%を占め、その他に落葉広葉樹などがある。

4. 調査の方法

計画区内の10ha以上の広葉樹林所有者869人の中から市や町および所有面積毎の所有者数を考慮に入れて、無作為に204人を選び、これらの人々を対象としてアンケート調査を行った。すなわち各人の特性や所有林分の林況ならびに経営意識に関する質問から成るアンケート調査票を送付し、記入後返送してもらった。ここで10ha以上の所有者を対象としたのはこの程度の面積を所有している所有者ならば経営意識も高く、調査の対象者として適していると考えたためである。また現地の状況を確認するために現地踏査を行った。以上の調査および関連資料の収集には宮崎県の協力を得た。

5. 調査の結果と考察

(1) 回答者の特性

得られた有効回答数は56通で、回収率は27%であった。居住地別では北川町が最も多く、日之影町、北方町、高千穂町が続いた。職業別では農業との兼業が多く、林業だけの場合は少なかった。所有面積別では10~30haの所有者が39%と最も多かったが、ここで意

Shigetaka KA1 (Fac. of Agric., Miyazaki Univ., Miyazaki 889-21)

Broad-leaved tree resources and the trend of management in southern Kyushu (I) In the case of private forests in northern parts of Miyazaki prefecture

外なことは調査の対象者として10ha以上の所有者を選んだのに、10ha未満と回答した人が45%もいたことである。森林面積のとらえにくさがうかがわれる。

(2) 林況

所有状況を見ると1か所、1林分だけの場合は少なく、ほとんどの所有者は数か所に複数の林分を持っていた。これらの合計は139林分であった。各林分の大きさは表-1に示すように1~5haのものが最も多かったが、10~30haのものも相当あり、ひとつでかなり大きな団地を形成する広葉樹林もあることがわかった。また林種別では天然林が多く139林分中108林分(78%)を占めていた。

林齢に関しては同齡林と異齡林の回答があった。同齡林は116林分でいろいろな齡級の林分が含まれていた。この中には1~2齡級の林分もあり、最近伐採が行なわれている様子を示していた。一方、異齡林は全部で23林分あり、林分によってはかなり高齢の個体(80~100年生)も混じっていたが、高い樹齡のものでも30年生以下の個体からなる林分が多かった。

林分を構成する樹種数については23種の回答があった。内訳は常緑広葉樹が8種、落葉広葉樹が11種、針葉樹が4種であった。表-2に出現頻度の高い樹種を上位から10位を示す。カシがほとんどの林分にみられ、シイ、ナラ類などがこれに続き、上位の樹種に関しては前述の広葉樹賦存状況調査資料にみられる内容とはほぼ同様の傾向を示していた。

(3) 所有者の経営動向

林種転換については考えていないと答えた所有者が全体の86%で非常に多かった。土地が適していないことや労力不足、スギ、ヒノキの材価が安いことが主な理由であったが、自然保護のためと答えた人も少数ながらみられた。

経営目的については表-3に示すように、用材や薪炭材の生産もやみられたが、パルプ材の生産が最も多かった。その他、このような木材生産ではなく、林地保全とか自然保護をあげる人や明確な目的を持っていない人もみられた。

作業法(ここでは伐採法)としては同表に示すように、択伐もみられたが、最も多かったのは皆伐であった。萌芽更新が容易な常緑広葉樹林が多いことがその一つの理由と考えられる。

その他、広葉樹林は林地保全や野生生物の保護の上で必要なので残して行きたいという意見や高齢化や労力不足で山の手入れができない現状、更に林業経営の前途を悲観する意見などがみられた。

6. おわりに

宮崎県北部の五ヶ瀬川計画区内の民有林の広葉樹資

表-1 面積, 林種別林分数と比率

面積 (ha)	天然林	人工林	その他	計	比率 (%)
1 未満	4	5	0	9	6.5
1~ 5	53	18	4	75	54.0
5~ 10	21	1	1	23	16.5
10~ 30	22	0	2	24	17.3
30~ 50	3	0	0	3	2.2
50~100	2	0	0	2	1.4
100以上	3	0	0	3	2.2
計	108	24	7	139	100.0

表-2 上位10種とその頻度

順位	樹種	出現林分数	頻度 (%) ¹⁾
1	カシ	85	61.2
2	シイ	47	33.8
3	ナラ類	45	32.4
4	クヌギ	41	29.5
5	ケヤキ	28	20.1
6	タブノキ	26	18.7
7	シデ	15	10.8
8	ツバキ	12	8.6
9	サクラ	6	4.3
10	カエデ	4	2.9

1) (出現林分数/全林分数: 139) × 100

表-3 経営目的と作業法

(単位: 人)

経営目的	人数	作業法 (伐採法)	人数
パルプ材生産	25	皆伐	21
用材生産	11	択伐	10
薪炭材生産	8	その他	3
その他	12	不明	14
不明	6		

注) 経営目的に関しては複数回答があった。

源とその経営動向についていくつかの傾向をうかがうことができた。この中で特に注目に値すると考えられるのは林種転換を考えている所有者が非常に少なかったということである。土地が適していないこと、労力不足、材価が低いことなどがその理由であったが、これらは予想されることとしても、自然保護を理由にあげる人がいたのは林業経営者側でも広葉樹天然林の持つ自然環境保全機能を積極的に評価する時代に入ったことを示唆しており興味深い。いずれにせよ、このような様子からみると当計画区内の民有林の広葉樹林は当面保全されていくものと予想される。

引用文献

- (1) 宮崎県: 五ヶ瀬川地域森林計画書, 1989
- (2) ———: 広葉樹賦存状況調査資料, 1986